
剣の名の下に…

時政

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

剣の名の下に

【Zコード】

Z5308D

【作者名】

時政

【あらすじ】

この世界ルナティックワールドに生息する魔物を討伐する部隊、桜花煉檄に入隊するために建設された学園で生活する日々……だが一人の女性によってその日々が砕け散る……

シャピトル1・桜舞い散る中で

桜が舞い散り春の日溜まりが続くなか
血に染められた細身の剣を前方に刺し、悲しみに染められた紅い瞳
をし、黒い髪を風に靡かせながら立つ17、8の青い制服を着た男
性を取り囲むように無数の屍が散らばっていた

その男の下に同じ制服を着た淡い茶色のロングヘアの女性が屍を
器用にかわしながらたどり着くと敬礼をし、サファイアのような輝
きを放つ瞳を向けた

「桜花部隊隊長、紅殿^{クレナイ}に報告!!

蓮花部隊、銀杏部隊共にノルマを達成し、本部に帰還したとのこと
!!

我々も直ちに帰還せよとの命令が下つております!!」

この男性の名は紅炎時^{クレナイエンジ}

この世界ルナティックワールドに生息する魔物を討伐する部隊、桜花^オ
花煉檄^{ウガレンゲキ}に入隊するために建設された戦士養成学校3校の内1校に身
を置く

「そうか…桜花部隊も直ちにレッドローズブラインに帰還する

「了解しました」

女性は再び敬礼をしその場を後にした

先程の学園3校の名は紅が身を置く最も東に位置する、太陽が大陸を赤く染めることから名が付いたレッドローズグランドにあるレッドローズライン

他にも、最も北にあるブルーローズグランドに位置するブルーローズライン

西に位置するグリーンローズグランドにあるグリーンローズラインだ

紅は前方の剣を抜き、空を切り剣に付いた血を払い飛ばし、腰にある鞘に収めて女性の後に続きその場を後にした

暫くすると小さな飛空艇にたどり着いた

その飛空艇は赤を主体とし、ツルをイメージさせるような金色の線があちこちにペイントさせた物だ

（今回の課題は下級インセクトモンスターであるビーンナイトを10体倒す事だ……）

ビーンナイトとは体長5センチの緑色の寄生型モンスターだ
主に死体に寄生し、人々に危害を加える

紅は飛空艇に入ると真っ先にコクピットに向かい一つ隔離された椅子に腰をかけた

船内は特に変わった様子はなく下に9人が各動力を動かす装置の持ち場があり、紅が居るのはその上に置かれた椅子だ

（モンスターの増加か…良く有ることだが今回は今までと何か違つ

たな……)

紅が一人考えている中、同じ制服を着た者達がそれぞれの席に付き飛空艇を発信させるため各機能を起動させていた

「隊長、準備がととのいました……」

一人の男性が紅の下まで来ると、右手を額にあてて敬礼をしながら報告をした

「さうか、なら直ぐレットローズブラインへ向かってくれ」

「分かりました……」

男性は回れ右をし、定位置に付くとパネルを操作しだした

「桜花部隊、紅 炎時。

ブラインに戻りしだい校長室に来るよ！」

レットローズブラインからの無線が入り、天井のスピーカーを通して皆の耳に入った

（校長室？
なんでもまた……）

紅は腕を組み顔を斜め下に向けて考えた

紅が考えている間にも飛空艇は飛ぶ準備ができ、今すぐにも飛び立てる体制だ

シャピトル2・フレイムレオン

数時間が経ち、飛空艇は周りが山や森に囲まれた一つの大学のような所に付いた

飛空艇はその建物の裏手にあるヘリポートにエンジン音を響かせながら着陸した

紅は皆が外に出た後に飛空艇から降り立つた

「みんないるな…では解散とする」

「了解しました！！」

紅が外に出ると9人が横一列に整列しており
紅がそう言つと敬礼をしたのち、一人を残して去つていった

「校長室に呼ばれたわね。

何か悪い事をしたの？」

残っていたのはあの時報告を知らせに着た女性だ

その女性は少しクスクスと笑いながら歩き出した紅と共に歩きながら話しかけた

「べつに…」

葵程五月蠅い奴が呼ばれないのは不思議だがな…」

女性の名は葵

水輝

アオイミスキ

紅の幼なじみで性格は明るく、クラスの中では人気者だ

「ムカつく言い方するわね！！」

人がせつかく心配してあげてるって言うのに……」

「迷惑だ……」

それに対して紅はクラスの中でもあまり人とは関わらず一人でいることが多い

クラスとはレットローデーズブラインで学年によって3クラスで分けられている

紅及び水輝は6・2で学園最高の学年だ

「あなたは変わらないわね本当に……」

水輝は急に静かになつた

「関係ないだろ。」

「見た目格好いいんだから性格さえ直したら更にモテるのに……」

「悪かつたな」

紅達が話してゐる間にいつのまにか学園の中にまで來ていた

「まつたく……」

ああ～……」

突然大声を出した水輝は口に手をあてて驚いていた
紅は五月蠅いと言わんばかりに両耳に人差し指で耳の穴を塞ぎ、五月蠅いとアピールしていた

「騒がしい……何かあったのか？」

「あ、あそこ見てよ。

進級した時に受けた筆記試験が貼つてあるのよ」

水輝は無理やり紅の裾を掴み中庭にある電子掲示板の所まで連れて行つた

「順位はと……」

水輝は前かがみになり、指を掲示板に当てる探し出した

（どうでもいいが短いスカートでそのポーズはやめた方が良いと思うが……）

紅が呆れていながら水輝はまたまた驚いた様子で紅を見た

「あなた凄いじゃない！！

おめでとうーー！」

水輝が拍手すると同じく周りに群がっていた生徒達も拍手しだした

「一体何だつてんだ……」

紅は伝言板を上から順に眺めていった

そこには学年順位一位の所に紅の名が載っていた

「アリババとか…」

紅は納得したかと思うとスタスターと校内に向かって歩き出した

「ちょっとどこに行くのよーーー。」

水輝は慌てて紅の後を追つた

「ふう…

忘れたのか？

俺は校長室に行かなくてはならないんだ」

それを聞いた水輝はそうだったと言わんばかりに手のひらを胸の前でポンッと叩いた

（……付近にきれいな……）

（校長室か……）

俺に一体何の用事があつて呼び出したんだ？
まあ、行けば分かることだが…）

紅達は校内に入った

校内は「ぐく」一般の大学と何ら変わらないが変わった所と言えば中央にある巨大なエレベーターに購買の他に武具を売っている所、各武器によつて異なる訓練所くらいだ

「確か校長室は三階だつたな」

紅は真つ直ぐ巨大エレベーターに向かつた

校内は三階建てで

一階は先程出た購買と武具店に訓練所

二階は教室と図書室

三階は校長室となつてゐる

地下もあるらしいが何があるのか生徒には知らされていない

そしてエレベーターに乗り込み移動した

「何でついてくるんだ…？」

水輝も付いてきていたようだ

「え…まあ気にしない気にしない」

（何しに来たんだコイツは…）

「校長室の扉の前までだ…」

「うん」

そしてエレベーターは三階に着き扉が開と

黒と黄色でまとめられた僧侶服を着て浅茶色の僧侶が如何にも被つ

てこるだらつと血の帽子を被つた男性が、じりじりと近寄つてきた

「演習部隊で桜花部隊隊長だつた紅 炎時か?」

「はい。」

「後ろの者は?..」

その男は紅の背後にある水輝に視線を向けた

（変に思われるのもやだしな…）

「怪我をしたらしくて、同じ部隊なので保健室まで付き添つて行かなくてはならないのですが、用事があるので一緒に来てもらうことで待たせようかと」

「… そつか、この部屋で待つてなさい。紅は奥の部屋に私と来なさい」

男性は少し怪しんでいたが何とかなつたよう紅を連れて奥の部屋に向かつていった

「来ました」

男性は茶色い扉を開けて中に紅を通した

開けた先に広がつていたのは普通の学校となんら変わりない校長室

だ
黒い皮のソファーに腰を下ろした人物が椅子を反転させ田の前のデスクに肘をおき手を組んで紅を見た
その男性の風貌は茶色いスーツに赤いネクタイ、白髪の頭をしている

「君が紅 炎時君だね？」

渋い年寄り特有の話し方で質問した

「はい。」

紅は敬礼をした

「まあまあ、楽にしてください。
私の名前は知つてますね？」

話し方からして優しそうな人のようだ

「渋木 舞踊。
シブキフエイ

この学園の校長であり総指揮官。」

「はは、良く分かつてますね。」

「俺に何のようですか？」

紅は体制を楽にし、質問をした

「そうでしたね。」

あなたはこれから聖獣フレイムレオンにあつていただきます。」

(聖獣フレイムレオン)「この世界に住む聖獣の内一体全ての聖獣の場所は把握されてはいないが、それに、個体としての能力も高いため近寄る事は容易ではないはずだが…何で俺が会わなくてはならないんだ？」

「何で俺が？」

「一般的の者はあえないはずでは…」

紅は考えていた事を渋木に言つた

「確かにそうですね…」

「ですがあなたは各能力が高く、フレイムレオンに会つても害はないかもしないし、使い手となる可能性は高いと考えた上でこいつ話してるので」

渋木は熱弁した

(使い手……)

「日時は明日の朝6時。

水輝と共に学園から出て東に位置する火炎の森に集合です。」

(何で水輝も……?)

「何故水輝も何です？」

紅は思つた事を素直に聞いた

「水輝は私の血縁の孫ですからね」

渋木は微笑ましく笑つた

（理由になつてないだろ…
つて孫？
知らなかつた…）

紅が色々考へている内にも話は進んでいき終盤にさしかかっていた

「で、君は自分の武器を持つてますか？
学園からの支給品の剣ではないものを」

「一応ありますが、メンテナンス中です」

「やうですか、今日中には終わるでしょ？から後で取りに行くと良
いでしょ？
では明日は期待しますよ。」

渋木が笑顔で話終えると紅は敬礼をした後、回れ右をし部屋を出た

「何の話だつたの？」

紅が出て来た所に水輝が近寄つてきて質問した

（少しば休ませろよ…）

「明日水輝と共に学園を出て東に位置する火炎の森に行くことにな
つた」

紅は腕を組み疲れた様子で聞いた事を水輝に話した

「良いなあ……使い手かあ……」

「まだ決まつたわけじゃないがな……」

羨ましがつてゐる水輝に間髪いれずに言つた

「やうだけどね。」

水輝と紅はエレベーターに乗り込んだ

「校長の孫だつたのか？」

紅は疑問に思つていたことを聞いた

「うん、やうだよ~」

水輝はやうらうと言つた。

(みんなは知つてゐるのか?)

紅達は一階に付くと武器屋に向かつて行つた

「おうひこりひしゃい……

武器なら向でも揃つてゐるぜ……！」

ちょっと小太りな中年の男性が頭にゴーグルを付けた作業着姿をして、紅達を出迎えた

店は小さいが、武器などが沢山壁やらなこやらに置いてある事から品揃えは豊富なようだ

「メンテナンスに出した俺の剣を取りに来たんですが…」

紅は店先の小さなカウンターに近づき店主に聞いた

「あつ…！」

ついでに私のもお願いします、陣さん」

水輝は思い出したのか自分の武器も頼んだ

先程でた陣と言つのは店主の事だ

機粒 陣 『キリュウジン』

学園で武器屋をやつている

「はいよつ…！」

陣は水輝には淡い水色を主体として羽をイメージとした模様が描かれたリボルバー式の拳銃を渡した
そして紅には黒を主体とし、炎をイメージさせるかのような赤い模様が描かれており

刀身の根本に丸い穴の開いた片手剣を渡した

「他に何かいるもんはあるかい？」

陣は腕を組み、紅達に質問した

「そつだな……魔玉の祈りと……マキヨク

「水の銃弾を下さ……」

水輝は紅の言葉を遮りそつ言つた

「おい……人が注文して

「あいよつ……！」

陣は聞いた分だけとりあえず紅達に売つた

（こいつといふとなにもできんな……）

紅は疲れ果てていた

そして、その後紅は追加注文をして望みの物を買った

買った物は魔玉の祈りの水バージョン

効果は魔法のウォーターウォールと同じで水の壁を作り出す戦士専用のアイテムだ

（翌日）

紅達は指示された場所に来ていた

「揃つてこようですね……」

渋木がゆっくりと紅達の方へと向かつてきました

「では、行きましょうか」

紅と水輝は木が炎に纏われている森の奥地へと歩み始めた渋木の後を追つて進み出した

「「」の森つて燃えてるのに火つとも熱く無いどこか、触つても燃えやしない」

水輝は手で赤く燃えている木の葉を一枚ひきつ手に乗せてまじまじと見ていた

「「」の森の炎は特別らしいですからねえ」

渋木は笑っていた

「おじいちゃんは相変わらずのんきねえ……」

「水輝にそう言わるとは思ってもしませんでしたよ」

渋木はまだ笑っていた

（後どれくらいで付くんだ？）

紅がそう考えている頃だった

田の前に三体の炎に包まれたワームが「」ひびき近付いてきていた

「あれはフレームワームですね……」

フレイムワームとは自らの身を炎でまとい、度々火災騒動を起す
下等モンスターだ

「ここは私が…」

水輝は銃に弾を込めて狙いを定め始めた

「待て…

あいつ等は能力は大したことないが素早い…
よつてここでは銃であるお前は不利だ」

紅はそう言つと水輝を後方へ下がらせると、先日買った魔玉の祈り
を使いつレイムワーム三体を動けなくした

「今だ」

その合図を聞いた水輝は左から順に倒していく

フレイムワームは悲鳴をあげたかと思つとその場に倒れ込み、跡形
もなく消え去った

「お見事…！」

と、笑いながら渋木は拍手して木の陰から出て來た

（のんきなもんだな…）

「ねえ、何で魔法使わなかつたの？」

と、水輝はひょこつと顔を紅の顔に近づけて質問した

（顔が近い…）

「この森は魔物が多く現れるんだ…」

「いちいち魔法を使っていたら身がもたん…」

紅はそれだけ言つと水輝の顔を手で押しどかして先に歩き出した渋木の後を追つた

話にも出てきたがこの世界には魔法が存在する種類は4つと少ないが、一つ一つの種類の中にまた細かく分かれているため量は果てしなく多い

中に今は禁止されている闇魔法も存在している

「あなたは何系の魔法が得意なんだっけ？」

（答えなきやいけないのか？）

紅は視線を一度水輝に向け、元の位置に視線を戻すと渋木も気にならぬかじりに耳を傾けていた

（やつぱり答えなきやいけないのか…）

「炎だ…」

紅はやれやれと言つ感じだつた

「やつぱりねつ！！」

私は水と白魔法」

水輝はキヤツキヤと騒いでいた

（やつぱりってなんだよ…

聞いてないのに話すし、テンションも高い…

朝からよく元気だなこいつは）

紅は疲れた表情だった

（フレイムレオンか…

やはり闘うのか？

だつたら俺は不利になるな…

剣が効けばいいが…）

紅は眉間に皺を寄せ、歩いている間ずっと考えていた

「着きましたよ」

（炎の洞窟）

「さ、入りますよ」

渋木は先頭をきつて中に入つていった

紅に水輝も後に続き暗闇の中に消えていった

洞窟の内部は炎系の魔物が複数生存し、先程現れたフレイムワーム

もその中に入る

そつ言つた魔物が巣くつ中紅達は真つ直ぐ伸びた道を進み、突き当たりについた

そこはマグマが溜まり岩が重なつた壁がドーム状にそのマグマ溜まりを包み込んでいた

「さ、水輝と私はしばらく此処で待機しましょう。

紅君は中に入りこれを中央に投げ入れてください」

渋木達はドームの入り口に立ち止まり、渋木は紅に手のひらサイズの赤いクリスタルを手渡した

「これは…？」

「炎の証しです。

フレイムレオンと友好の証とも言えるでしょう。

まあ、後は投げ入れればフレイムレオンがはなしてくれるはずです」

紅は剣を確かめてから中に入つていつた

（いいで良いんだよな？）

紅は先程受け取つたクリスタルを中央に投げ入れた

すると投げ入れた部分がぐつぐつと一部だけ激しく沸騰しだした

（なんだ？）

紅が視線を向けた先には髪が赤く燃え、巨大な牙や額に生える角に全身が赤く燃え上がったライオンがその激しく沸騰していた所からマグマを垂らしながら飛び出してきた

(「いつが…フレイムレオンか…」)

「我が名は炎の聖獣フレイムレオン…
お前か?
我を呼んだのは…」

シャピトル③・逆巻く炎

「お前がフレイムレオンか……？」

紅は田の前に降り立つたフレイムレオンが顔を近づけて紅の顔を覗きこむようにしている体制で迫つて来ているにも関わらず、微動だにもせず冷静に相手の事をそう言つて確かめた

「面白い…

久しぶりに骨のあるガキではないか…」

フレイムレオンは口の端を吊り上げてニヤリと笑みを浮かべて続けた

「いかにも。

私はフレイムレオン…

何度も言わせるなガキ…」

フレイムレオンは紅の周りを周回している

「で…我に一体何のようだ？」

そう聞かれた紅は昨日渋木から聞いた事を手短に話した

それを聞いたフレイムレオンは天井に向けて大きな高笑いをした

「我がお前の下部になるかも知れないと言つたのか。

我を操れる程の実力もなさそうなのガキに対して……」

（確かに。）

だがガキガキ言われて不快だ。）

「まあいい。」

ガキ……万が一我がお前の下部……つまり召還獣となつたとして我の力を使つて何を願う？」

（願い？）

そんなものの俺にはない。

ただ流れるままに学園を卒業して桜花蓮檄に入り一生を魔物退治で終わらせる。

だから願いと言われても……）

「……願いなどない。」

紅は思つた事を言った

「ぐあははは……

願いなどないと。

人は何かしら願うものだ。

金持ちになりたい、奴を超えたいたい……人それぞれあるのだよ……

それがないと申すのか」

フレイムレオンは更に高笑いをした

紅は無言無表情でただその姿を見ていた

「まあここ。

少しお前に興味を持ったわ… 今から我が出す炎の化身と戦い、その化身を倒して見せよ…」

フレイムレオンは「ヤリと笑みを放った

「倒したら召還獣として俺に従ってくれるのか?」

「さあな…どのみち勝てば分かることだ」

紅の質問にいたえると後方のマグマが溜まっている場所の上に浮遊し、瞼を静かに閉じると氣を集中させ始めた

(…来る…)

紅は剣を斜め下に構え、氣を集中しているフレイムレオンに視線を向けた

すると逆巻く炎の柱が一本現れ、その炎の柱から赤い鎧を重装備し、真っ赤に燃える槍を片手に持った重騎士が紅の前へと降り立つた

(上位召還獣コアナイト…?)

召還獣にも段階があり

下位 中位 上位 特級と言つた感じに別れている

下位召還獣は小さく、学園に通つていれば楽に召還できる

中位召還獣は人と同じ大きさで、主に獣の姿が強く、召還できるのは学園でも上級生のみ

「や…我に力を見せよ…」

そして目の前にいる上位召還獣「アナイト

上位召還は学園でも教師の中でも召還できる者が数少ない、とても
召還が困難だと言われている

最後に特級召還獣：

聖獣の事をさし、未だかつて召還した者は愚か、従えた者すらいる
かいないかと言つくらい極めて召還するのが難しい

（さて、どうするか…

俺が得意とする魔法は炎…そうなると魔法に頼ることは出来ない。
ここはこのプラスティックブレードで何とかするしかないか…）

紅の武器

プラスティックブレードとはただの片手剣ではなく、魔力結晶とい
う特別な結晶体を剣にある窪みに入れるにより様々な力を手に
入れる不思議な力を秘めた剣なのだ

現在紅が所有する魔力結晶は一つ

ちなみに魔力結晶はこの世に一つしかない、種類は光と闇だ

紅は制服の内ポケットから光り輝くダイヤモンド型の物体を窪みに
入れた

おそらく光の魔力結晶体だらう

「ほつ…魔力結晶体を扱うのか…珍しい…」

「……」

紅は下段に剣を構えたままコアナイトに突っ込んで行つた

「アナイトは向かってくる紅に対し、左手を紅に向け炎の上位魔法火炎竜を放った

竜の姿をした炎の柱は紅に向けて真っ直ぐ向かっていき直撃した

「……」

炎は何かに吸い込まれていき、無傷の紅が向かって行く姿のままだ
つた

（光の結晶体は相手の魔法を無効にして防ぐ。
だから心置きなく上位魔法が放たれても突っ込んで行ける）

紅は「アナイトに一撃加えた

ぐら…

紅の一撃によりアナイトは体制を崩したが、直ぐに立て直し宙に浮いたままの紅に槍を真っ直ぐに突き刺しにかかった

「く…」

紅は剣を槍に対して右斜めに受け、そのまま左へ流した

（今だ…）

紅は地面に着地するとすぐさま受け流されてよろめいたアナイト

の下に潜り込み、下から上に向けて飛び上がりながら剣を突き立てて真つ一についた

（終わりだ…）

紅が着地すると真つ一についたコアナイトは炎に包まれ、消え去つた

「なかなかやるではないか…」

フレイムレオンは紅の背後に降りたつとそう言つた
紅はプラスティックブレードを腰のベルトに装着させてから振り向いた

「で…俺の召還獣になつてくれるのか？」

「まだだ…魔力結晶体を扱う者は珍しい…いや、お前だけだらう。
それを扱える者などいなかつた…
久しぶりに血が騒いだ…我と戦い勝利せよ。
無論、お前が勝てば我はお前の召還獣となつてやる」

フレイムレオンは火の粉をまき散らせながら火炎の翼を羽ばたかせ、
やる気満々だ

（やはり戦うことになつたか…
先程の上級召還獣とは比べ物にならないくらい強い…
勝ち目はあるのか？
いや、勝つ…！）

紅はプラスティックブレードをフレイムレオン目掛け構えた

「やる気になつたか…
我を楽しませてくれよ…

紅 炎時…」

「……」

（まぢは相手の出方をつかがうのが適切だな…）

紅は剣の平面部分をフレイムレオンに向けて両手で剣を持ち、防御の姿勢になった

「まずは出方をつかがうか…
確かに能力のわからぬ相手に対しても行動としてはあつてこる。
だが、我に対してもそれは愚かな行動と言えよう…！」

フレイムレオンは紅目掛け突進した
紅は左へ重心をずらし回避すると脇腹目掛けプラスティックブレードを叩き込もうとした

「聞かぬ…！」

フレイムレオンは翼を羽ばたかせ紅の頭上に飛び上がりかわすと急
降下し右爪で紅を壁に叩きつけた

「がつ…」

紅は口の中を切つたのか叩きつけられ壁にひびが入り石のかけらが

パラパラと落ちる中、口から血を垂らしておひかなりのダメージを負つたように見える

（く……早い上に力も強い……）

フレイムレオンは足を紅からどかした

すると紅はその場に倒れ込むかのように膝をついた

「どうした？ もう終わりか？」

フレイムレオンは翼を羽ばたかせまだまだ楽しそうと言わんばかりだった

「……」

紅はゆらりと立ち上がりプラスティックブレードを強く握り締め、フレイムレオンに向かって行つた

「ほつ…

そうになくてはな…」

フレイムレオンは意識を集中させその身を火炎に包み込み上位魔法火炎竜を連発させた

その火炎竜は紅に向かつて行つた

「ここの数ならその光の魔力結晶体だけでは防ぎきれぬであろう…」

フレイムレオンはニヤリと笑みを浮かべた

「そういう悠長にしていられるのも今のうちだ

「なにい！？」

フレイムレオンの背後には紅が悠々と欠伸をしながらたつていて
はないか

フレイムレオンは体を反転させて紅の方向に向く

（何時のまに…）

そろそろ火炎竜があたるだらうと思われる方向に少し振り返つてみ
るが

「そういうことか…」

そこには確かに紅がいた
いや、紅の分身がだ

その分身は火炎竜をもろにくらご、ジュワッ！と水が激しく蒸発する
音と共に消え去つた

「水の造形魔法で俺自身を作り上げ、その分身の影に隠れつつ走り
ながらあんたが火炎竜を発動させた時に風魔法…本来は攻撃魔法で
あるウインドスピアを威力を下げて三連続で自信の背中に向けて放
ちあんたの背後に回つたって訳だ」

ウインドスピア…

本来は風のが槍のように相手を突き刺す中位魔法だ

フレイムレオンは翼を羽ばたかし、後方へと飛ぶ

「魔法を上手く使いこなせるようだな…」

「本来の使い方にこだわるのが嫌いでな

ため息をはきながらそう言つ紅

「やちらの方が良い…

最近は本来の使い方しか使わぬ頭の堅い奴らが増えた…」

「それは警めてくれているのか…？」

なら礼は言つ

それを聞いたフレイムレオンは豪快に笑いだした

（何だ？
急に…

それよりだ…あの魔法の連発は厄介だな…背後に回つて倒そうと思つたが翼がやすみなく羽ばたいているせいで火の粉が舞ちり近づくことすらできなかつた…

正面からしか無いか…）

「さあ… 我をもつと楽しませろーー！」

フレイムレオンは上位魔法を発動させながら紅へと突進を仕掛けて

くる

(一か八か！！)

紅は懐から昨日購入しておいた魔玉の祈りを目の前に投げつける。投げつけられた場所からは天井にまで届かんとばかりの物凄い水の量の壁が出来上がり、フレイムレオンはやむ終えなく急停止をする。

「いんな小細工は我にはきかぬ！！」

一度息を大きく吸い込み吐き出すとともに並以上の威力はあるだろう火炎を水の壁にむけて放射する。

無論大量の水が一気に蒸発したのだから周りは霧が覆うように白い世界となっていた

(今だ…)

その世界に包まれたフレイムレオンの下から紅は更なる上空へと蹴り上げ、更に思いもしない出来事に無防備の状態で蹴り上げられたフレイムレオンを追撃し下から脇腹へとひと蹴り、そしてどめにフレイムレオンの上にまわりかかと落としをくらわせ地面へと叩き付ける

「がはっ…」

「倒したか…？」

紅は息を荒げながら地上に着地すると跪き横たわったままのフレイムレオンを見る

〔正直いいまでもやるとは思わなかつたわ…〕

(しふとこ…)

紅は立ち上がりプラスティックブレードを斜め下に再び構える

「やつ構えるな。

我はもう戦つ氣はない。」

それを聞き紅は腰にプラスティックブレードを挿した

「なら、俺の召還獣になつてくれるんだな？」

フレイムレオンはゆっくりと立ち上がり

「あ。

渋木が他の奴を呼んだ時点で従えなければならぬ約束だったしな」

(……)

〔元契約者だ。〕

呆気にとられている紅に対し更なる追いつきをくらわしたフレイムレオンだった

「まあいい、せつせつと契約をかわすぞ」

紅はシンプルな指輪を右中指にはめてフレイムレオンにむけて差し出す

「まあ、その前に話すことがある」

「話すことだと……？」

紅は手をもとに戻し耳をかたむける

「我等、聖獣と呼ばれるよくなつたのはかなり昔の事だ。
本来この世界にはいってはならぬ存在であつた我等だが、世の理が崩
れ始め……いや、崩した者がいる。
その者は何故そのようなことをしたのかは分からぬが、そ奴が何か
起こしたうとしてこるのは確かだ。
今は気にすることはない……だがいずれお前に関わつてへることだ。
聖獣を従えるものとして。」

（厄介！」とせめめんだ…）

「何か言いたそつだな？」

「厄介！」とせめめんだ…」

それを聞いたフレイムレオンはと幅広いに笑い紅の近くまで

歩み寄る

「 まあ、 我と契約を 」

（…… 言われるまでもない ）

紅は再び指輪をフレイムレオンに向けて

「 女神ルナの名の下に 」

我、 紅炎時は聖獣フレイムレオンを我が召還獣として契約する。 」

言い終わると共に一人の地面に赤い魔法陣が広がり逆巻く炎に包まれた

（ … 契約成立だな ）

「 ジル、 我を置いて行く氣か主殿！ ！ 」

（ なんだ？ ）

その場を後にしようとした紅を呼びかける可愛らしげの声が
その声のする方には

「 ジル、 うーとだ… 」

その場には小さなライオンに小さな角一歩、 小さな赤い羽が生えた
可愛らしい小動物が

「 我等聖獣は契約を交わしたらこの姿になるのだ。
契約成立の証にちゃんと指輪も変化しておるわ 」

紅は指輪を見る

確かに先ほどと違いライオンの「トザインを施した指輪になつている

召還獣は契約主の指輪から呼び出されるのだ
だが聖獣は普通とは異なり、力だけを封じ込められて本体は小さく
なつたまま地上にござれるとのこと

「…まあ、行くぞ」

「ま、待たぬか！」

スタスタと歩いて行く後ろをパタパタと飛びあとをついつ行くフレイムレオンだった

（葵の反応が…めんどりだ）

そして葵達のもとに戻った時予想通りの出来事が

「か、かわいい～！～」

紅の頭の上にちょこんと乗つていてフレイムレオンをキラキラした
目で見たり、つんつんとつづいたりしてはしゃいでいるのだ

「ねえねえ」のかわいいのなに？なに？

「小娘、我に気安く触るでない～！」

「その態度もかわいい～」

（人の頭の上で騒ぐな…）

「ねえ抱っこしていい？いい？」

「好きにしろ」

紅の了解を得た葵はフレイムレオンを思いつきり抱きしめた

「あ、主殿酷いではないか！！
パートナーが困っているのだ。
早く我を助けぬか！！」

パートナーといつ言葉を聞いた葵は顔の前まで抱き上げてじーっと
フレイムレオンを見つめる

「あなたもしかして…聖獣フレイムレオン？」

「その通り。

早く我を離さぬか」

「…………ええーーー！」

数秒の間が空いた後葵はとてつもなく大きな声をあげたのだった

（騒がしい奴らだ）

「いやはや、お久しぶりですね。
フレイムレオン。」

「その声は渋木か…とこゝの事は」の小娘はあの泣き虫娘か」

抱き上げたまま石化して居る葵の手の中から顔だけをゆりくつと近付いてきた渋木へと向ける

「ええ、私の孫です。

さて、あなたがその姿だと嘆ひひとせ…」

〔契約をかわした〕

「みたいですね。
彼はどうです？

無愛想ですが面白い能力の持ち主ですよ」

「まあ、主殿が我等聖獣の行き先をどう導くか楽しみではあるな。」

「はは。だいぶ氣に入つたみたいですね。
紅君のことを。」

「な、何をいうか…」

フレイムレオンは何度かのチャレンジの後に葵の手から逃れ紅の頭へと向かっていった。

(頼みましたよ紅君…)

「ついで紅はフレイムレオンと言つ炎の聖獣と契約をしたのだった

だがこの契約をきっかけに彼の旅は始まるのだが彼らはまだそれを
知らない

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5308d/>

剣の名の下に...

2010年10月26日05時44分発行